ときの話題

持続的農業をめざして

――マイペース酪農の実践に学ぶ――

室蘭工大教授（北大名誉教授）
山田定市

持続的農業の発展

近年、食料自給率の低下をはじめとして、国内農業の破壊がより激しく進行する中で、持続的農業の発展にたいする関心が一層強まっている。このことはたんに農業の問題にとどまらず、工業生産が超絶的に拡大し、地球環境破壊と南北問題を含む経済的破綻が急速に進んでいる事態の中で、それへの反省として〝産業の持続的発展〟ということが人類社会の共通の課題となっていることと深くかかわっている。

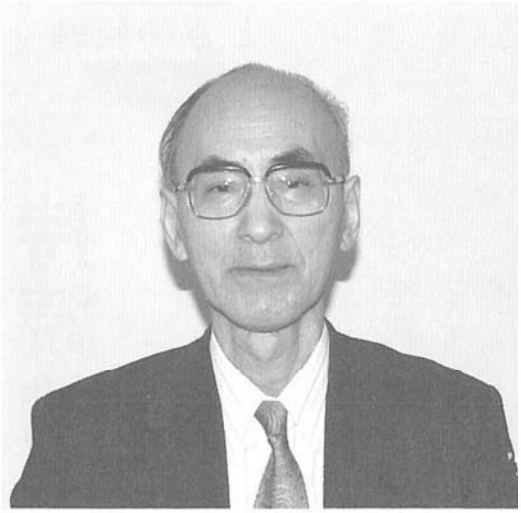
いうまでもなく、一九六〇年代以降の農業「近代化」政策が、農産物の市場開放と相まって〝ゴールなき大規模化〟の道をひた走りに走り続ける中で、農業と農民生活の破綻が極限に達しているのであるが、九〇年代に入ってからの「新農政」とWTO体制は、このような危機的状況を一段と加速させている。

こうした中で、持続的農業をめざすことが、農業の危機的状況を乗り切るための批判的実践としての意義を持っているといえるが、それはさらに、地域づくりの根幹をなす地域産業の持続的な発展に欠かせない条件をなし、ひいては〝持続的産業の発展〟という人類共通の課題に迫るための基礎条件となっているということができる。その意味で来るべき二十一世紀に向けて持続的農業の発展ということを、広く国民的課題にすることが求められている。

マイペース酪農

そこで、この問題について、一つの実践事例に沿いながら、具体的に考えてみたいと思う。持続的農業の実践は、すでに各地で多彩に展開しつつあるが、ここで紹介するのは根室・別海町におけるマイペース酪農の実践である。

根室・別海町はわが国でも有数の酪農郷として名高く、そこでは大規模酪農が地域の大勢を占めているのであるが、そのような中でマイペース酪農は、心ある酪農家が寄り集まって、酪農「近代化」政



▲山田　定市（やまだ　さだいち）さん

山田定市（やまだ　さだいち）

1932年　北海道に生まれる
1961年　北海道大学農学部博士課程修了
1982年　北海道大学教育学部教授
1995年　同大学高等教育機能開発センター生涯学習計画研究部長
1996年から室蘭工業大学教授

編著書：『地域農業と農民教育』（日本経済評論社、1980年）
『地域作りと生涯学習の計画化』（北海道大学図書刊行会、1997年）
他多数

策が強いる〝ゴールなき多頭化〟に抵抗しつつ、自分たちの間尺に合う経営と生活をめざして二十数年来努力を積み重ね、その成果が次第に実を結びつつある実践として注目される。

ここでは何よりも家族の生活と健康を大事にして、決して無理をせず、牛の飼養頭数もそれに見合った頭数にまず抑える。さらに、人間が無理をしないだけではなく、牛にも無理をかけない、という考え方で、一頭あたり搾乳量も極度に増大させることはしない。そのうえ、土地にも無理をかけない、という考えから化学肥料を多投して牧草収量を過度に追うこともひかえている。

これらのことは、自然界の摂理と生物の生命活動に依拠した生産活動としての農業の本来の姿に立ち返ったやり方であるといえるが、それはたんなる自然復帰や浅薄な減量経営ではない。

人間尊重　自然との共生

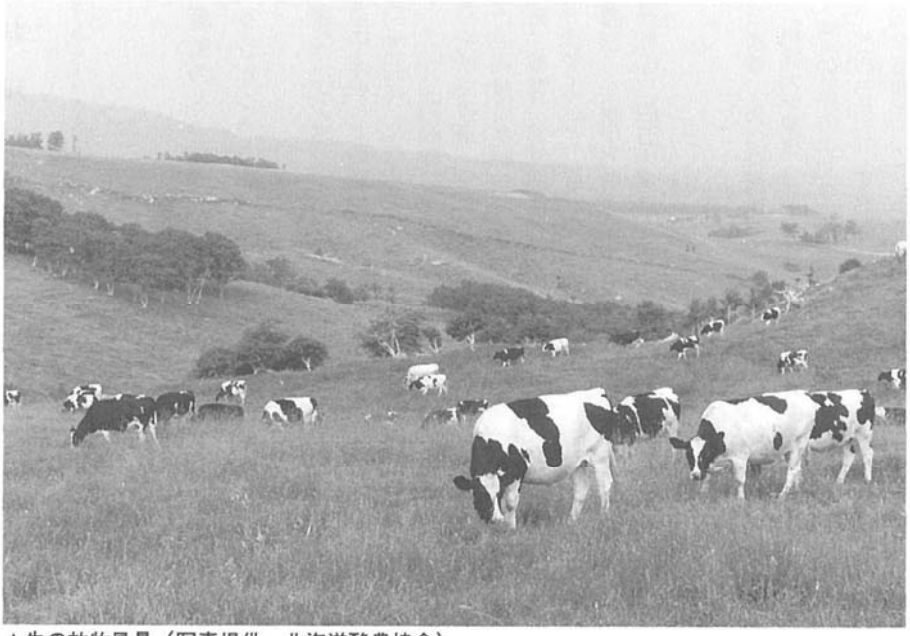
その底には、明確な科学的洞察と法則性にもとづく行動が貫いており、それによる「経済効率万能主義」にたいする人間尊重、自然との共生の立場からの痛烈な実践的批判としての自己主張が貫いているのである。

この農家群の中には経営規模を拡大しないで農業所得の増大を実現している農家も少なくないが、それは自然循環の重視が地力の増進につながり生産性を挙げていること、規模拡大にありがちな過剰投資を抑えてコストを低減していることなどをはじめとして、より人間的な生活をめざす経営が、決して経済効率や収益性と矛盾するものではないことを示している。

さらに、マイペース酪農はたんに与えられた条件のもとにおける適性経営規模をめざしているわけではなく、多年の営農実践にもとづく農政にたいする鋭い批判と強い要求が打ち出されていることにも注目しておかなければならない。

マイペース酪農交流会

このような実践を支える活動と



▲牛の放牧風景（写真提供　北海道酪農協会）

して、地域をあげての学習会とともに『マイペース酪農交流会』が月に一回のペースで定例的に続けられているが、そこには酪農家ばかりではなく、地域でさまざまな仕事に従事している住民が自由に参加し、その話題もたんに酪農問題にとどまらず、広く地域づくりや生活、教育、文化などをめぐる自由な語らいと実践交流の場になっている。

そのうえ、マイペース酪農の地域では、女性が生き生きして活動している。マイペース酪農による労働時間の短縮は、何よりも女性を苛酷な労働から解放してきた。学習会など、さまざまな会合でも、夫婦同伴が当たり前で、妻が先に自己紹介し、そのあとで自分の夫を紹介する。ここではむしろ「婦夫同伴」なのである。

生活時間にゆとりができるから、地域の人びとともに地元産の素材を生かした食べ物の手作りや手芸、共同の子育て活動、地域の福祉活動などにも熱心である。ここでは、地域文化を創造し、より豊かに育てる活動が、農業生産を基礎に芽生え花開きつつあるのである。

人間性の回復と自己実現

こうした実践を通して、酪農をおいて別海町のまちづくりはない、という点では、いまや町民の中で広く深い合意が成り立っている（この点を抜きにしては、訓練移転にたいする住民の対応も正しく理解することは困難であろう）。

このように〝マイペース酪農〟とは、人間性の回復と自己実現をめざす集団的な実践にほかならない。時代への警鐘と、みずからの生きるバイタリティが科学的に裏打ちされ、学習によってより豊かな実践となっている好例であるといえよう。

このマイペース酪農が、最近、各方面から注目されつつあり、同じような実践が近隣町村にも広がりつつあるが、それは長年にわたる実践が、いまや時代の求める課題に応える普遍的で豊かな教訓を含みつつ、発展していることを示しているといえよう。